

支援部だより

堺市立上神谷支援学校
支援部だより No. 3
2026年2月発行

今回は、言語聴覚士（ST）への相談事例を紹介いたします。専門家の先生から具体的な支援のアドバイスを頂いていますので、今後の子どもたちへの支援・指導のヒントにしていただけたらと思います。

【言語聴覚士（ST）への相談内容】**事例1**

基本的な活動において自立しており、言葉かけて動くことができるが、担当者の指示を待ってから行動することが多い。自ら能動的に活動ができるようになるためにはどのようにしたらよいか。



【言語聴覚士（ST）からのアドバイス】

○目を使うことが得意ではないので、絵カード等を使用するのはしんどい面がある。

→タブレットは好きなのでアプリ版であれば、使うことができるのではないか。

○言葉かけをすればするほど指示待ちになってしまふので、「どこでやりとりするか」をメインに考える。

→「報告に行き、許可をもらって動く」を指導の基本にしてはどうか。タブレットをやりとりのツールとして使い、1つ終わったらタブレットを担当者に持って行き「〇〇終わりました」と報告する。担当者は「分かりました。次どうぞ」と伝え、次の内容はタブレットで自分で確認できるようにする。



○人を意識できるようになるため、人を介して「何かやってもらえる」経験を増やしていく。

→「手伝って」、要求カード、遊びの場所カード、給食場面で使うカードなど、それぞれ場面ごとに分けて作り、担当者が持つておいて、対象児が指差して伝えられるようにする。



【言語聴覚士（ST）への相談内容】**事例2**

①自分の中でのルールが多く、正しい動作になるように支援しようとすると気持ちが崩れてしまう。その際に手が出ることもある。



②指吸い、服を噛む、ひもを噛むなどの行為が頻繁にみられる。

③要求が分かりにくいことが多い、思いが伝わらなかったら怒ることが多い。

④咀嚼する力が弱い。食事の方法もこだわりが強く、基本的に1つのお椀に（汁物のお皿が多い）ごはんやおかずを混ぜて好きなものを食べている。食べられるものも多いが偏食も多い。

【言語聴覚士（ST）からのアドバイス】

【相談内容①】

自分自身を苦しめているマイルールがたくさんあり、「それが崩れても生活できている」経験を身体が小さい低学年のうちにどれだけ積めるかが大切。



→・自分なりのやり方でやるとその事実が残るので、やってしまう前に正しいやり方を体験させること。

- ・指示や命令ではなく、やり取りの中で。「ダメ」「ちがう」ではなく、本人なりのやり方を真似しながら正しいやり方をやって見せるなど。
- ・正しい形で終わらせる。

【相談内容②】

短いホースのようなものを首から下げるなど、噛む用のかみかみグッズに移行させるのがよい。最初は使わないかもしれないが、少しでも口に入れたら、その後は指を吸ってもOKからスタートしていく。



【相談内容③】

バラバラの絵カードを見せるより、トイレなら「トイレ・ある・ない」の3枚のイラストを1つにまとめたり、「てつだって・できた」の2枚のイラストを1つにしたりして、そのカードの中で指差しをさせるほうがよい。



【相談内容④】

お盆にすべてのお皿が載っていると混ぜてしまうので、1品ずつお盆に載せ、お盆の上にお皿が2つ以上にならないようにする。手掴みが続いている時には、そっとスプーンを持っている手に触れ、さりげなく促すことで、集中を切らさずに食べることができる。

言語聴覚士（ST）への相談内容

事例3

自分が抱えている不安をうまく言葉で伝えられず、気持ちが高まってくると、怒りの行動（大声で叫ぶ・机や椅子を蹴る）が表れる。常に不安を抱えているようで、過去に起きた嫌な出来事をよく覚えており、蓄積された不安がふとした拍子にフラッシュバックし、怒りの行動につながっている。



言語聴覚士（ST）からのアドバイス

- 過去の経験（嫌な経験）が本人の中でどんどん上乗せされ、整理されていないから、自分に都合のいい「MYルール」を決めてしまい、やる・やらないにつながっている。
 - ➡これまで蓄積してきたもの（不安材料など）を整理していく。
 - ➡言語でやり取りすると繰り返しになってしまうので、本人から話を聞く時は言葉だけではなく、紙に書いてフローチャート式のように“図式化”して整理していく作業が有効。
- 『ソーシャルブック（マイブック）』の作成
 - ➡本人の不安を整理し、困った出来事をソーシャルストーリーとして用紙に記録していく。不安な気持ちを紙に書いて「見える化」し、本人の『お助け本』として活用していく。

